

事実と解釈

植民地の叛逆ⅡインドⅡ安南Ⅱ台湾Ⅱ朝鮮

九月の末から十月一ぱいにかけて、もっとも僕等の注意を惹いた新聞記事は、東洋の各植民地に頻々として起る、暴動的叛逆の事実の報道であった。

植民地は、征服の事実を、もっとも赤裸々に語るところである。征服者がいっさいの権利と利益とを壟断し、被征服者がいっさいの義務と犠牲とを負担する、有史以前からのそしてまた種々なる形式の下に今日まで連続し来たった、一大事実の縮図を示すところである。したがって植民地におけるこの征服の事実およびそれに対する叛逆の事実を研究することは、ただちに人類社会史の基調を闡明することとなる。

しかし複雑なる征服の事実の下にある僕等被征服者は、等しくまた僕等の主人を主人とする、きわめて単純なる征服の事実の下にある植民地の被征服者と同じく、かくのごとき研究の自由なる言論を許されていない。主人を同じくする僕等被征服者の間には、お互いの同情すら

も、あからさまにはできない。あるいはこんなことですらも、あまり無遠慮に書き立てては、いけないかも知れぬ。

そこで僕は、僕自身のほとんど何等の議論も註釈も加えずに、ただ諸処の新聞紙に現れたままを、次に抜書きすることとする。

まずもっとも遠いところから言えば、インドの革命熱である。『時事新報』によるに、英国の政界にはよほど前から「インドの不安」なる語が醸されていたが、近来踵を接して起るインドの叛乱はやや重大な意味をもって視られるようになった。

インドの革命思想は日露戦争で東洋人の日本が捷ったという眼前の事実に刺激されたものだと言われているが、久しく根ざしていたインドの革命は欧州大乱を動機として勃発した傾きがある。インドに駐屯した英兵は戦乱とともにわずか五万を残して本国に引揚げられ同時に二十万のインド兵も欧州の戦地へ送られたが、戦線のインド兵はしきりに手紙を郷党に送り欧兵の軟弱を嘲ってインドの革命思想を煽ったと伝えられている。現にインドでは八月の末から西北国境のバルチスタン附近で、

数千の叛兵起り、今なお討伐に向った英兵と一勝一敗の間に砲火を交えつつあるが、革命の導火線は、本年の三月にインド総督の暗殺を企てたラホール事件から引続いて、シンガポー

ル、セイロン、香港、ボンベイなどが暴動現れ、さる六月には米国の某港から六千挺の銃器がひそかにボンベイに陸揚げされた事実があり、それ以来英国政府は革命党に対する新法令を布いて嚴重に取締りつつあるが、今なお、

革命の恐怖から、脱することができない。ラホール事件では二千余名の嫌疑者を捕え、百五十余名の革命党員が処刑されたがこの事件と前後して多数の党員は米国や日本へ亡命し、現に東京にもインド革命党の首領株ビー・エヌ・タクル、エッチ・カプタ、ビー・エス・タックその他十数名の亡命者が流寓生活が続けている。彼等は「孫一派の支那革命党員が日本で安全に亡命生活をしているのを見てはるばる日本へ逃げて来た」と嘆じているが、一部の士人間では日本政府として英国への気兼は然ることながら万一の場合国事犯人を英政府に引渡すようなことがあつては日本の国辱なりと称しひそかに亡命客等の身の安全を企画して遣っている。

なお『東京朝日新聞』が、このビー・エヌ・タクル氏の談話として掲ぐるところによるに、

氏は、年齢あたかも三十、かつてカルカッタ大学に業を了えて文学士たり、次いで米国カリフォルニア大学に遊びて帰国し、インド総督暗殺のラホール事件に連坐し、事成らずして亡命の余儀なきに至れり。由來英国官憲のインド革命党に対する警戒はすこぶる嚴重周到にして、三億の民衆中武器を携え得るものわずかに一万に過ぎず。しかも小銃の照尺は三百メートル以

上の照準を許さざれば、とうてい大事を執行するに術なく、またいやしくも二、三集会して政治を論ずればすなわち捕縛せられ、新聞紙はことごとく英国人の發行に係わりつつある等。

インド革命の将来は支那のそれに比しさらに悲觀すべきものあり。ただし民心の革命熱は未だ容易に絶滅すべくも非ず。現にインドの西北辺境には多少の動揺を醸しつつあり。加うるに欧州戦に参加しつつあるインド軍約二十万の同胞よりの通信により、西欧文明諸国の実状忌憚なく暴露せられ、東亜に対する西欧文明の權威は今次の大戦によりて少なからず失墜せるがごとし。すなわち東亜各国民の独立的精神は民族的自覚とともに今後次第に勃興するに至るべし。なお吾人の計画に対しドイツ側より使嗾するやの風説あるも事實何等の交渉に接せず。

また、シンガポールにインド兵の叛乱があつて、日本水兵をしてようやく鎮圧し得たことは、九月頃の各新聞紙によって報ぜられた。

次には、久しく雲南にありし東京農科大学助教林学士河原勘次郎氏が、帰朝の途次長崎で語った談話として、『大阪朝日新聞』によって、仏領安南における大規模の叛乱が報道せられた。

一昨年貴州より唐繼堯將軍の転任して雲南に入るや、一部に反対派を生じ、その余波として昨年一月および五月、大理臨安南府に叛乱起り、討伐したるに乱兵は銃器その他を携帯したる

まま片田舎に逃げ込み、その後少なきも八十人ないし百人多きは二百人ないし三百人をもって隊をなし、まったく軍隊同様の組織により路上ラッパを吹き鳴らして白昼横行するに至れり。討伐軍の向うことあるも神出鬼没さらにその効なかりしが、彼等は漸次南方に集合し、常には雲南省の境を越えて安南に入り、目今は雲南、ビルマ、安南の境なるメンウーを中心として、安南の革命党および同地方の蕃人シャンを集合し、約一万人の同勢をもってフランス政庁に対し、叛乱を起すに至れるなり。フランス政庁は大いに狼狽し、某陸軍少将を司令長官として土人および仏兵よりなる約三千人の軍隊をもって討伐せしめたるが、容易にその目的を果する能わず、さらに軍用列車による一大隊の兵を雲南より輸送したり。東京（トンキン）にては昨年より叛乱続出したるも、今回のごとき大規模の叛乱はかつてその比を見ず、結局某国がある交換条件の下に出兵するにあらざれば鎮圧するに難かるべしと称せらる。仏政府はきわめて事を秘密になし居れり。

かくインド、シンガポール、安南というふうには、だんだん近づいて来ると、お次は台湾の番になる。そしてこの台湾からは、匪徒一千幾百名死刑五百何名というような、台湾総督府民政長官発内務省着電が、もう一カ月ばかりの間毎日飛んで来る。
今その最近の着電によるに、

十月二十日臨時法院において匪徒五十四名に対し判決を言渡したり。内死刑四十七名、懲役十五年五名、同十二年二名あり。

そして新聞紙の、さらにこれに付け加うるところによれば、
因に本日までの死刑累計は五百五十二名、懲役十五年十三名、同十二年十九名、同九年三百名、無罪三名にして、本日までの処罰者総計九百七名なり。

この死刑の宣告を受けた匪徒五百余名は、台南監獄で、二十日から毎日二十名ないし五十名宛死刑を執行されているのであるが、なお毎日四、五十名宛の新しい審問があって、検察官は大概死刑を求刑しているので、結局死刑は八百余名に上るべく、したがってその刑の執行を終るは十一月下旬であろうという。

『時事新報』は、千人寡婦の悲劇喜劇、台湾陰謀の匪徒処刑についてと題して、次のごとくこの事実を語っている。

十月までに起訴せられた匪徒の数は合計千二十六名で、内すでに判決の済んだものが八百六十名ある。さらにこれを細別すると、

死刑五百五名、懲役十五年七名、同十二年三十八名、同九年三百名、無罪三名、死亡七名で、審理未着手のものが百二十名あったが、その中ようやく審理が済んで近々判決されるも

のが五十四名ある。なおこの外四日に起訴されたものが四十三名で、別に検挙されているのが約四百名もある。公判はココ二週間ばかり休止のことになるだろう。

その裏面 さて右のごとく夥しい匪徒の処刑を見つつある裏面には種々な悲劇喜劇が隠れている。啐吧唯(タバニイ)支庁下の土匪村だけを窺ってみても、現に千二、三百名の新しい寡婦ができた。それらの亭主というのは暴動当時軍隊と戦って銃殺されたのもあれば、啐吧唯支庁内で乱暴を働いて臨検の処置を取られたのもある。また死刑にやられたのもあれば、長い懲役に処せられて容易に帰っては来ないというのものもある。

凌ぎの場所 こうした寡婦や孤児は、ある一定の場所に收容されているのもあれば、どこに落付くこともできず、暴動によって焼かれた跡に仮小屋を造ってようやく雨露を凌いでいるものもある。内地人の一隊がそこを通ると、彼等は路傍に佇んで、いかにも悲し気に目送している。中には十七人の若寡婦が乳呑児を抱いて、芭蕉の葉蔭に淋しく佇んで、何か物思わしげに沈む夕日を眺めているものもある。

土饅頭の数 訳も分らぬ五つ六つの子供が焼けてしまったわが家の跡を探って、穴開錢を拾い取り、砂や水で洗い磨いているのもあれば、苦苓(せんだん)の実を弾丸に擬えて戦争事をしていて腕白もある。中には捜索隊に付いてはいり込んで来た苦力などと慰慰を通じて新しい家庭にさきの悲しみを忘れて大いに奮ったのもあるというが、とにかく彼方の村此方の村

に新しい土饅頭ができて、鬼哭啾々のありさまは何としてもよい心持のものではない。

棺桶の製作 こんな話もある。というのは確定の外にまだたくさん死刑の宣告を受けそうなものがある様子で、最終までには千人近くにもなろう。これを台湾三監、六箇所の死刑台に上せて、一人に十五分間かかるとしても非常な日子を要する。一方にはどしどし判決ができる。一方には棺桶を作る。その忙しさはまるで戦争のようなもので、匪徒蜂起の際に討殺されたものを合すると約三千人は埋められる訳だ。

かくのごとき大惨事を惹起した事件というのは、今その切抜きをなくしてしまつたので遺憾ながら詳細に述べることはできないが、その一部分たる次のごとき台北新庄事件(『大阪朝日新聞』による)を見ただけでも、容易にその全体を窺い知ることができよう。

台北新庄事件被告は、すべて七十人すでに起訴されしが、首魁は逃亡して未だ縛につかず事件の張本人は新庄街料理人楊臨(三十一)という無頼漢にて、かねて新庄支庁の仕打に不平を懷き、機を見て支庁を襲い、警察官を殺害し、首尾克く行かばさらになすところあらんと、本年二、三月頃より同志を糾合して、

革命党を組織し、支庁に対し不平あるもの租税の負担重きに苦しむものらを説きて加盟せしめ、台湾を日本の手より奪還して支那政府の下に復帰せしむべしと説き、陰曆三月同志を集

め、十名を小頭に任じ、いよいよ党勢を張ることに謀議一決せり。しかるにその後南部に優勢なる暴徒蜂起せりとのことを聞き、彼は事を挙ぐるはこの時なり機失うべからずと、陰曆七月三日夜同志会合し、十五日夜すなわち八月二十五日月明に乗じて支庁襲撃を実行することを決議したるも、同志の一人が中途変心してこのことを支庁に密告したるより発覚したるものなり。

そしてこの南方部における暴徒の事件については、その余波として、次のごときことが伝えられている。

台南市内東巷街西来庵は、昨年六月以来今次の陰謀事件の本管となり、またその廟内にあるところの神像は迷信の中心となり、その迷信は大いに匪徒の利用するところとなりたれば、台南庁にては事件暴露と同時に同庵門を竹矢来をもって封鎖したるが、近頃に至り庁参事区長および同庵管理者協議の上、同庵の神像および裝飾品等いっさいを焼却して、もって迷信を一掃し、禍根を断ち、庵の建物はこれを台南庁に寄附することとなり、九月二十五日午前十時警官立会の下に神像および裝飾品等およそ三千点は炎の中に消え去りたり。〔大阪毎日新聞〕

最後に朝鮮が来る。そしてここにもまた、目下ある陰謀事件が審議せられつつある筈である。もっともそれは、詐偽取財というような名義の下に取扱われているが、まんざら詐偽ばかりでもなさそう。いずれにしても朝鮮は陰謀の国である。ことに明治三十九年かの保護条約以来は、元老閔泳煥の憤死、安重根の伊藤侯爵暗殺、尹致昊等百五十余人の寺内総督暗殺の陰謀、碩学崔益鉉、李康年等の各地における暴動、その他ほとんど数うるにいとまがない。

ここまで書いて思ひ出すのは、七、八年以前に、日本、支那、朝鮮、安南、フィリッピン、インド等の同志が相謀って、亜州和親会を設立したことがある。

その会員としては、近く北京で袁世凱のために毒殺されたという風評のあるいわゆる民族主義者の章炳麟、先きの参議院議長であった無政府主義者の張継等の多くの支那人、共和主義者の多くのインド人、そして堺利彦、山川均、および僕などの日本の社会主義者や無政府主義者が、その大部分を占め、すでに二、三回の会合を遂げて、まさに諸種の活動に移らんとしたのであったが、例の赤旗事件のために日本の同志は獄に投ぜられ、次いで支那およびインドの同志も日本政府の強圧に余儀なくされて各地に離散し、ついに何等の効果をも挙げる事ができずに解散してしまつた。

その規則の中の数項を次に掲げて、この植民地の叛逆一篇を終ることにする。

- 一、本会宗旨。在反抗帝国主义。期使亜州已失主權之民族。各得独立。
- 二、凡亞州人。除主張侵略主義者。無論民族主義。共和主義。社会主義。無政府主義。皆得

入会。

三、亜州諸国。或為外人侵食之魚肉。或為異族支配之備奴。其陵夷悲慘已甚。故本会義務。當以互相扶助使各得独立自由為旨。

四、亜州諸国。若一国有革命事。余国同会者應互相協助。不論直接間接。總以功能所及為限。

なお本文校正の最終日、二十九日の『大阪朝日新聞』夕刊によれば、台湾陰謀事件は、左のごとくにて大凡終結したという。

二十七日臨時法院にて匪徒二百七十九名に対する判決宣告されたが、内死刑二百三十三名あり。三十日新庄陰謀団に対する判決あると同時に本件公判まったく終決となり、臨時法院は閉鎖さるる筈なり。同法院は八月二十日開設され、二十五日を第一回として公判開廷二十八回、被告人すべて千四百十三名にして、内死刑九百三名、懲役十五年十五名、十二年五十九名、九年三百五十九名、無罪七名その他は新庄陰謀団にて判決未済に属す。死刑は羅春、余生芳等主魁十余名、外は去る二十三日三十五名、二十四日三十名に対して執行されたのみにて、その後またまた中止され居れり。

個人的思索

一
何学問でもそうだが、その最初からの研究方法を教えずに、ちゃんとできあがった学説を最初から覚えこませるのが、今日の学校教育である。だからその研究方法と言えば、学ぶべき学説の順序正しき排列である。参考書の羅列である。なるべく自分で頭を使わずに、しかも無駄のないように、多くの書物を読むことである。

したがって今日の学者の書物は、すべてきわめて解りやすく書かれてある。読んでさえ行けば、大して考えずとも、また大した疑いも挟まずに、ひとりでに合点の行くように書かれてある。これは一寸見にははなはだ結構なことのようにも思われるが、しかしその實際をよくよく考えて見れば、はなはだ怪しからぬことなのである。すなわちかくのごとき書物の書き方は、教育を官營する国家にとって、次のごとき二重の利益がある。まず第一には将来国家のために有用な人物となるべき生徒に、短かい時間にいろいろなことを覚えこませることができ。そ

して第二には、国家のためには常に有害な個人的思索の能力を、早くから減殺させてしまふことができる。

この個人的思索の能力を発達さすということが、実を言えば、教育の本当の目的でなければならぬのだ。またいっさいの学問の研究手法というのも、そこにもとづかなければならぬのだ。けれども各個人のこの能力の発達には、今日の組織の国家や社会にとっては、その存亡に關するゆゆしき一大事である。各個人はただ、国家の教える通りを、そのままに覚えこんでいなければいけないのだ。ことに政治学とか、法律学とか、経済学とか、史学とかの社会科学においては、国家の教える範囲以外に、決して個人的思索を許さない。

そこでこの社会科学の範囲内における本当の研究は、何よりもまず、政府的思想によるいっさいの学者と書籍とを斥けて、自らの眼をもって社会的事物を観察し、自分の頭をもってそれを判断し得る力を造ることになければならぬ。

一一

僕はよく、読者諸君から、社会主義や無政府主義や、または広く社会問題の研究をするのに、どんな書物をどんな順序で読めばいいか、という質問を受ける。そしてまた、多くの人々から、日本文で書かれた書物のはなはだ乏しいことについてしばしば訴えられる。前者の質問

は外国語を読み得る、きわめて少数の人の要求である。しかし後者の訴えは、ほとんどすべての読者諸君に共通する、一般の要求であろうと思う。そこでまずこの後者の人々に向けて、社会問題研究法の大体を説こうと思う。

僕はまず、何よりも先きに、諸君の周辺の事実によって、諸君の研究を始められんことを望む。どんな小さな事実でもいい。あるいは小さいほど、その研究が便宜であり、かつ有効であろうとも思う。またいかに小さな事実といえども、その関係する範囲はきわめて広い。本誌『近代思想』に「僕等の生活」の一欄を設けて読者諸君の寄書を募っているのも、要するにこの研究の奨励に過ぎない。読者諸君が、もし日記の形式によって、日々身边に起る一小事の観察と、それに対する感想と批評とを蒐集して行くならば、その日記は社会問題研究の貴重なる好材料となるに違いない。

また、事は少しく大きくなるが、地方にある数多の友人に、この頃僕の勧告しかつ依頼している、はなはだ興味深い社会問題研究方法がある。それは村の歴史、ことに経済史を作ることだ。一村でなくてもその中の一大字だけでもいい。あるいは一農家だけについてもいい。

まず諸君自ら、諸君の村の個々の家の現在における経済状態を調査して、その詳細の統計表を作ってみる。たとえば、大地主、中地主、小地主、自分自身の田畑を耕す農夫、他人の田畑を耕す小作人というように。そしてさらに十年以前のその統計表を作って、それと今日のそれ

とを比較して見る。そこには、必ず、何等かの差を見出すに違いない。次に、その差の一つ一つについて、できるだけ詳細にその原因を調べて見る。かくして諸君は、地主と農夫と小作人との関係について、諸君自らの確固たる観察と考察とをなし得ることになる。また、農業と工業、農業と商業、農家と高利貸、農家と租税、その他種々なる興味深い関係が、自ずから諸君の前に展開して来る。

かくして諸君は、単なる一村落の十年、二十年、三十年、四十年、もしくは五十年間の歴史を調べて見るだけで、ほとんど社会問題の全部に触れることができる。そしてそれらのあらゆる問題に対して、諸君自らの観察と考察とによる、諸君自らの断乎たる判断を下すことができるようになる。

三

これは農村についての一例に過ぎないが、その他何事にもあれ、諸君の興味をひいた一社会的事実について、その事実の内容の詳細と、それに関連する諸事実とを、それからそれへと調査して行くだけでも、優に五冊や十冊の書物を読むよりも、有益かつ確実な社会的知識が得られる。かつかくして初めて自己の個人的思索の能力を本当に発達させて行くことができる。

いい加減な嘘っぱちを、馬鹿でも金さえあればいれる大学の学生等に読ますように、いか

にも本当らしく巧みに書き上げた、社会学や、政治学や、法律学や、経済学の書物などは、その嘘つき具合を研究する外には何の用もないのだ。また、政府的思想から脱けた自由主義者の学者や、社会主義者や、無政府主義者の書物を読むにしても、ただこの個人的思索を進める補助にさえ役立てればいいのだ。

研究や思索は遊戯ではない。僕等は僕等の日々生活において、必ず何事かを考え、またその考えをあくまで進ませて行かなければならぬ、ある要求に当面する。どうしても放つては置けない何等かの事実におつかる。僕等の思索や研究は、この事実に対する、僕等自身の著にやまれぬ内的要求であるのだ。僕等は、僕等自身のこの内的要求を、何よりもまず他人の著書によって、すなわち他人の観察と、他人の実験と、他人の判断とによって、満足さすというような怠けものであってはいけない。よしすでに受け入れているある判断があったところで、さらに自らの観察と実験とによって、再び判断し正さなければいけない。本当に自ら刻苦して、骨身にまでも徹する、僕等自身の判断を造り上げて行かなければいけない。

この個人的思索の成就があつて、初めてわれわれは自由なる人間となるのだ。いかに自由主義をふり廻したところで、その自由主義そのものが他人の判断から借りて来たものであれば、その人にあるいはマルクスの、あるいはクロポトキンの、思想上の奴隷である。社会運動は、一種の宗教的狂熱を伴うとともに、とかくにかくのごとき奴隷を製造したがるものである。僕

等は、いかなる場合にあって、奴隷であってはならない。

書物を読んでいないことをもって無学であると自卑するがごとき風習は、僕等の間からまったく一掃し去らなければいけない。僕等は、他人のいろいろな判断を机の上に並べ立てて、一種の論理的遊戯をもって、それをさまざまに混交し排列する、いわゆる学者の真似をする要はない。むしろかくのごとき方法を侮蔑し排斥して、初めて個人的思索の端緒につくことができるのだ。

書物を読むよりもまず、自らの周辺の生きている事実に眼を転ぜよ。そしてその事実に対して、いたずらに頭の中で理屈をこね廻さず、ただそのありのままを注視せよ。その事実そのものに対してはあくまでも深く、またその事実と関連する諸事実に対してはあくまでも広く、できるだけ観察と調査とを遂げよ。また必要の場合には、この必要ははなはだしばしば起ることであるが、自らその事実の中に身を投じて見よ。すなわち自ら自らを実験に供して見よ。かくのごとき観察と実験との度重なるに従って、初めて僕等は、僕等自身の、動かすべからざる思想を築き上げて行くのだ。

この個人的思索を欲しない輩は、いわゆる衆愚である、永遠の奴隷である。歴史を創ることなくして、歴史に引きずられて行く、有象無象である。僕等とはまったくの他人である。

僕等の自負

いつの時代にでも、その生活にあき足らない、そしてそれとは違う何等かの新しい生活様式を求め、ある社会的憧憬がある。この憧憬が、順々に、次の時代の文明の本質——少なくとも主観的の——を形づくって行く。そして幾時代かの文明の、その時代時代の社会的憧憬の連鎖の中に、人間生活のますます拡充して行く必然的要求が暗示される。

文明批評とは、要するに、この人間生活の必然的要求の闡明である。この要求に照らされた社会的現実の観察である。そしてまた、文明のこの主観的本質と客観的現実との間の、一致和合の叡策である。

われわれは今資本家文明と名づける一文明の頽廢期に立っている。新しい社会的憧憬がわれ

われ自身の内から燃え上がって来る。外からもやはり焰のような同じ雰囲気がわれわれに促進して来る。

しかし、日本の思想界はまだ、われわれのこの社会的憧憬を、本当にしっかりと握っていない。ただぼんやりとそのスピリットを握っているだけに過ぎない。われわれ自身の要求がすでにどこまで進んでいるか、またこの要求に応ずる社会的現実がどんなものでなければならぬか、日本の思想界はまだはっきりとこれに答えることができない。

そればかりではない。日本の思想界はまだ、自らのこの無能にすらも本当に気づいていない。いわゆる進歩思想家等はわれわれの生活のほとんどあらゆる方面に漲っている社会的憧憬を言い現すのに、わずかに民本主義などという時代遅れのきわめて曖昧な言葉で得々としている。

僕等は、この幼稚なる日本の思想界における、本当の意味での文明批評の、確かに唯一者であることを自負する。

正義を求める心

「民衆は、最後には善が勝つというみんなの心の奥底に持っている衷心からの確信が、芝居の中で証明されなければ承知しない。これは、その心の無邪気なせいではなく、かえってその健全なためである。民衆のこの確信には道理がある。この確信は、生命必須の力であり、また進歩の法則でもある。」

これは、ロマン・ローランが、その『民衆芸術論』の中に、民衆劇脚本作家の心得の一つとして「単純な道徳」という項目の中に説いた言葉である。そしてなおロマン・ローランは、民衆劇の第一条件としての娯楽を説いた中にも、これと関連して次のごとく言っている。

「少数のある人々がちょうどいたちが卵を吸うように憂鬱を吸うことが好きだからといって、この貴族どもの知識的禁欲主義を民衆に強いることはできない。民衆は猛烈が好きだ。しかしこの猛烈は、実生活の上でもそうだが舞台の上でも、民衆が自分をその人になぞらえて

見ている主人公を破滅させてしまつてはいけない。民衆は、自分自身はどれほど諦めていても、それほど絶望していても、その夢想の人物のためにはあくまでも樂觀的なものである。悲しい結果になつては堪らない。しからば民衆には、散々人を泣かせて置いて最後にめでたしめでたしで終るような、メロドラマでなければいけないと言ふのか。決してそうではない。そういった粗雑な虚偽は、アルコールと同じく、民衆を無氣力にする催眠剤である。麻酔剤である。われわれが芸術に持たせたいと思ふ娯楽の力は精神的元気を犠牲にするものであつてはならない。それとはまったく反対のものでなければならぬ。」

生命の一般法則は、攻撃に対する防禦ということである。しかもこの防禦は、きわめてしばしば、反撃すなわち防禦的攻撃となつて現れる。これが生活組織の反射運動もしくは刺激性に由来する、生命の原始的本能である。この本能がなければ生命は不可能である。そしてこの本能のより発達しより確保されたものほどより容易に生き残る。

犬と遊んでいても、子供とでも同じことだが、時々負けてやらなければ本當に噛みつかれる。打たれても打ち返すことのできないのは、生存競争の上の劣敗を感じる。不平等を感じる。それでは堪らない。生きて行くためには、打つものには打ち返し、噛むものには噛み返すことができないならぬ。他から加えられた害悪を返すことのできないものは、やがて生

存競争場裡から消え去らなければならない。生きて行くことができないのだ。

生命とは、要するに、復讐である。生きて行くことを妨げる邪魔者に対する不断の復讐である。復讐はいつさいの生物にとつての生理的必要である。

生命のこの必要は、高等動物たる人間においても、多少の変化はあるが消滅はしない。他の諸本能と同じく、その方向は變つても、その力は依然として存在する。意識的になつても弱められはしない。

道徳とは、本然的に言えば、この生命必須の力の肯定である。自己に対するおよび他人に対するこの生活本能の尊重である。そしてこの尊重が、動物および人類の社会生活の根柢であり、かつ正義の、自由平等友愛の、根本義である。

憎悪は生活本能の一様式である。生命に対する危険の感じである。生物にとつての、その神経系統のしたがつてまた筋肉系統の、貴重な一刺激物である。

再びロマン・ローランの『民衆芸術論』の中の言葉を次に引用する。

「強暴といふことは決して芸術のつきものではない。人間の良心が、それに衝突してそしてそれを打破って行かなければならない、不正不義のつきものである。芸術は闘争を絶滅することを目的とするのではない。芸術の目的は、生を豊富にし、力強くし、さらに大きくさらに善

くすることにある。されば、もし愛と結合とがその目的であるとすれば、憎悪はある期間までは恐らくはその武器である。セント・アントワヌ郊外の一労働者が、いっさいの憎悪は悪であるということをしきりに説いて聞かせた一講演者に言った。『憎悪は善である。憎悪は正義である。被圧制者をして圧制者に反抗して起たしめるのはこの憎悪である。私はある男が他人人を圧制しているのを見れば、私はその圧制を憤る。その男を憎む。そして憤慨し憎悪する自分を正しいのだと思う。』悪を憎まないものはまた善をも愛しないものである。不正不義を見てそれと闘う気を起さないものは、全然芸術家でもなければまた全然人間でもない。』

不正不義とは自己および他人の生活本能の蹂躪である。最近犯罪学の一学者は言う。犯罪とは個人性の侵害であると。

類人猿の一種が他のあらゆる生物に優越してついに人類とまで進み得たのは、生理学上および解剖学上の諸理由を除けば、主としてその団体内の各員の相互の生活意志の無意識的承認が高度にまで発達していたからである。種族と個人とがまったく同一視されるまでに相互の生活意志が尊重されていたからである。社会的本能が卓絶していたからである。

民衆には、原始以来の、この自由と平等と友愛との伝統がある。

民衆はきわめて実際のなかつ活動的なものである。その見聞するいっさいの事物から行為の規則を抜き出すとする。他人の生活そのものを道徳の実例として見ようとする。

その卓絶した社会的本能は、ある悪例の成功が自分の耳に囁く悪の奨励に憤る。そしてこの悪例の成功ということにその社会の破滅の一要素を見出す。自己および他人にとっての危険を予感する。

悪が成功しては堪らない。何とかしてその悪を叩きつぶしてしまわなければならない。少なくとも最後の勝利が悪人のものであってはならない。

かくして民衆は常に悪や不正不義の勝利に反抗する。そしてこの反抗の論理的結果は、その勝利を決して確定的性質のものと見ない信仰に導く。

この信仰は同時にまた進歩の信仰である。生命の歩みの限りない前進の信仰である。

民衆が今攻撃者と防禦者との格闘を傍観するとする。民衆はいつでも防禦者に同情する。そしてその攻撃者のはね退けられた時に拍手する。攻撃者は少なくとも外観上その瞬間の公安の素乱者である。

巡査と泥棒とが格闘している時にでも、民衆はやはり心ひそかに巡査の失敗と敗北とを希望

する。これは、巡査が公安維持者であり泥棒が公安素乱者であるという教えられた理論と感情とに従わないで、一つはただその瞬間の外観に従うからである。そしてもう一つは、民衆の心の奥底に、かの教えられた理論と感情とに叛く何ものが潜んでいるからである。僕等はこの後の方の感情をそら恐ろしく思う。

この信仰が破れた時、その個人の、その社会の、生命は停滞する、破滅する。

しかし生命の力は強い。ことに民衆の生命の力は強い。正義が現実の上に行われなくなった時、民衆は常に窒息するばかりの圧制の下に忍辱しつつ、ひそかに新しい生活様式の社会的憧憬を創る。

宗教はその正義を求める心の溢れの一つである。ただ宗教はこの正義の実現を現実の上に諦めて夢想の中に求める。

プロフテン 摂理アイネリヒテイワ、シヤステイス ということを認めない宗教はない。摂理とは要するに善には幸福を悪には苦痛という配分的正義アイネリヒテイワ、シヤステイス のことで、それが此の世では十分に行われないが彼の世では完全に回復されるというのである。あるいはもっと近代的に言えば、肉体的には十分に行われないが精神的には完全に回復されるというのである。宗教の本質はこの信仰にもとづく。

仏教もキリスト教も回々教もいずれの宗教もみな正義が現実の上になんたたく廃れ果てようとした時と処とに起った。貧富の懸絶とともに生活本能の相互の尊敬が失われた時、民衆の新しい社会的憧憬とともに現れた。原始キリスト教に帰れというキリスト教の幾度かの宗教改革運動もやはり同じ事情の下に生れた。

しかし民衆はもうあまりにしばしば宗教にだまされた。彼の世や内的の配分的正義に満足するにはあまりに实际的でありかつあまりに活動的である。宗教はもう民衆には用はない。

現実の上にあまりにしばしば正義の敗北を見ている民衆は、その生活本能のあまりにはなほだしく蹂躪されている民衆は、今や正義の勝利に飢え渴えている。

現実の上には勿論、せめては文字の上だけでも舞台の上だけでも、その正義を求める心の満足を求めている。

もし芸術が民衆のこの要求に応じなかったら、民衆の新しい社会的憧憬に応じなかったら、恐らくは民衆は永久に芸術を顧みないであろう。

また、もし芸術が民衆のこの要求をごく皮相的に解釈して、ただ泣かせたり笑わせたりして民衆に現実を忘れさせることしかなかったら、芸術はその民衆と一緒に死滅に赴くの外はないであろう。

民衆は今その新しい生命力から湧き出た新生活の憧憬の上に立っている。

芸術は民衆のこの憧憬に元気づけるものでなければならぬ。この憧憬を現実の中に進めて行く元気を与えるものでなければならぬ。中途の暗黒を照らして行く理知の光明を与えるものでなければならぬ。

さらに言葉を換えて言えば、新しき世界のための新しき芸術は、新勸善懲惡のものではなければならぬ。正義の支配する芸術でなければならぬ。よし正義がその作品の最後まで負けていても、そのために読者や観衆を悲嘆させ絶望させるものでなく、さらに一層の歓喜と元氣と理知とをもって現実の闘いの中に跳りこませるものでなければならぬ。

国泥棒の見本

一

南北アメリカの間の、大西洋に面して、メキシコ湾の口から東に延びた、西インド諸島というのがある。アメリカ、デンマーク、イギリスなどに属する群島であるが、その中にひとつ、ハイチという独立国がある。それが、最近、欧州戦争のさ中に、火事泥的に、アメリカに泥棒された。

ハイチは建国百十一年の、西半球ではアメリカに次ぐ、古い共和国である。そしてその建国と同時に奴隷を廃止した。ある意味ではアメリカよりも五十年古い自由の国である。どこの国にも何の害をするんでもない。小さな、平和な国だったのだ。それが、何のもっともらしい理由もなしに、勝手極まる、残忍な、武力的征服の犠牲になってしまったのだ。

二

一九一〇年、と言えば、十一年前のことだ。アメリカはハイチの国立銀行に投資して、そろそろこの国の財政的支配を謀りはじめた。

それはまず、何か事のあるたびに、この銀行から政府に、いろいろと難題を持ちかけさせて、その財政をくずして行くことであった。そしていい加減その財政を乱れさせて置いて、やれ関税同盟を結ぼうの、攻守同盟を結ぼうのと言って、ていよく保護国にしまうさんだんであった。

一九一四年十二月には、ある条約を迫って来る前日、白昼国立銀行の金庫を持ち出して、紙幣償還基金の五十万ドルをアメリカの軍艦に運びこんだりさえした。こうして財源を奪い取って置いて、言うことを聞かせようというんだ。が、それもうまくは行かなかった。

三

一九一五年七月二十七日、ある革命団体によって大統領の官邸が夜襲された。その革命団体というのは、一言で言えば、ハイチ共和国の独立擁護団だ。その翌日、大統領は傷ついて、官

邸を棄てて、フランス公使館に逃れた。

その日の朝、この夜襲の間に首府ポルト・オ・プレンスの獄中にある政治犯人等が死刑になった、といううわさが町じゅうに拡がった。それに憤慨した犠牲者等の親戚は、すぐにフランス公使館を襲うて、大統領を引きずり出して殺してしまった。

こうした混乱した場面が行われている間、一時は、それを防ぐに足る何の団体も政府もなかった。しかしその間に、掠奪も放火も、また故大統領の外には一人の殺戮も行われなかった。そしてこの革命が済むと、すぐに平和は恢復されて、公安委員会が秩序維持の任に当ることになった。

四

するとやはりその晩のことだ。アメリカの水兵がどん町に上陸して来た。そして驚き呆れているハイチアンの武器を取りあげて、何の抵抗もなしに町を占領してしまった。

二週間過ぎた。上陸軍はポルト・オ・プレンスとその附近を完全に占領し、なお他の水兵等は北部のカプ・ハイチアン市を占領した。

そしてこうして置いて、八月の十二日に、新しい大統領を選挙させて、それにまたある条約を「修正なし」に受けいれることを迫った。

しかしこの強迫も立派に斥けられてしまった。そしてアメリカ軍は、全国のあらゆる税関を占領してそのハイチアン官吏を放逐するとともに、ついに九月三日、海軍少将ケバアトンは自らハイチ政府を統御し、かつポルト・オ・プレンスおよびその附近に戒嚴令を布くという宣言を出した。

かくしてついにハイチはアメリカに泥棒されてしまったのだ。

五

この事實は、五カ年間嚴重な軍政の下に緘口されていたハイチアン自身によって、ついに発表された。すなわち、最近、ハイチ愛国者同盟のアメリカ派遣員によって、三万語の報告文となつて國務省および元老院外交委員会に呈出された。

そしてその間アメリカの軍政のいかに残忍を極めたかは、次のただ一事だけでも十分に推察される。

アメリカの占領以前には、カプ・ハイチエン監獄の囚人の数は、平均して一年五十人を超えることはなかった。そしてその死亡率は減多に一年四人に達することはなかった。

しかるに、このカプ・ハイチエンの監獄で、一九一九年に、毎日八人の死骸が井戸の中に棄てられた。そして一九一八、一九、二〇の三年間に、四千人あまりの囚人が死んでいる。

なおこれと同じような数字が、他のあちこちの監獄にも見出される。

そしてなおその外に、女や子供の殺戮、赤熱した鉄の棒での拷問、水攻め、放火、掠奪、その他あらゆる暴行が駐屯軍の犯罪として数えられている。

これが、正義と自由との権化であるウィルソンの国が、そう言って讃めたたえられていた真最中にやっていたのけた、国泥棒の立派な見本の一つである。